

序 論 中世奥羽の霊場

はじめに

本書で扱う中世の霊場とは、中世に生きた人々を救済し信仰を集めた、神仏の霊験あらたかな土地、神社・仏閣などの神聖な地であり、参拝・納経・納骨などの宗教的行為が営まれた場所である。中世奥羽には多くの霊場があり、考古学・文献史学・思想史・民俗学などの視点から分析が加えられ、それぞれの立場で発見・評価されてきたが、本稿ではその概要を資(史)料に抛りながら整理したい。

霊場研究の先覚者中野宣任は板碑・五輪塔などの石造物、塔婆、埋経、納骨など極楽往生のための呪的儀礼行為により残されたモノ(信仰遺物・石造物の紀年銘等)資料に注目し「中野一九八八」、佐藤弘夫は全国を通覧して霊場の特徴を整理した「佐藤二〇〇三」。さらに時枝務は寺院跡・神社跡、宿坊・居館、周縁部の経塚・墓地・納骨遺構などの個別遺跡・遺構の時系列複合的把握「時枝二〇〇九」を行っている。これらの先行研究は、霊場を探るてがかりともなっている。

現在まで発見・評価されてきた中世奥羽の霊場であるが、入間田宣夫・大石直正は多賀城と松島を中心とする地域に注目し「入間田・大石編一九九二」、伊藤清郎は羽黒山と出羽三山・羽州金峰山・鳥海山と飛鳥・蔵王山・御所山(船形

山)・白鷹丘陵〔伊藤一九九七〕、佐藤弘夫は中尊寺・立石寺・黒石寺・恐山〔佐藤二〇〇三〕、さらには石造物である板碑〔佐藤二〇〇五〕について注目している。

ついで東北中世考古学会では第11回大会に霊場をテーマとして研究大会を行い、平泉・松島・名取熊野社(宮城県)・瑞巖寺・国見山廃寺・恵日寺・立石寺・名取熊野の板碑・北上川流域の霊場・出羽国北部の古代城柵・津軽阿闍羅山周辺・北上川流域の板碑などの個別事例について討議を深めた〔東北中世考古学会二〇〇六〕。また、狭川真一を研究代表とする中世墓資料集成研究会の手により、東北地方の中世墓が集成されていることも重要である〔中世墓資料集成研究会二〇〇四〕。個別論文として取り上げられている霊場として、ジャガラモガラ〔川崎一九八九〕、正法寺と周辺〔佐々木二〇〇四〕、大門山遺跡〔千々和一九九二〕、高清水善光寺〔佐藤正二〇〇二〕などがある。

以上のようにして発見・評価されてきた中世霊場は、現在まで信仰が継続する事例と信仰が継続しない事例とおまかに分かれる。前者は現在の景観と信仰を遡る形で資(史)料と信仰を複合的に理解することができるが、すべてが中世に遡るわけではなく、時期的な変化を内包していることを忘れてはならない。後者の多くは遺跡であり、残された資料を分析することによって理解することができる。

1 中世の立石寺

最初に中世霊場として日本国内に広く知られ、かつ現在まで信仰が継続する山形県山形市山寺立石寺(写真1)を例としながら霊場の実情を整理してみよう。霊場としての立石寺信仰の成立過程を把握し、さまざまな時期的変化を内包することを理解したい。

立石寺は貞観二年(八六〇)慈覚大師円仁の創建と伝えられる天台宗の霊場寺院であり、単に山寺とも呼ばれてい



写真1 山寺立石寺(左より五大堂・開山堂・経堂)

る。中心地区は国史跡・名勝に指定されている。第三紀に属する凝灰岩層を基盤とし、百丈岩を中心に左右に屏風を広げたように巨大な露岩が連なり、その間に寺院が営まれる。露岩には風食によるハチの巣状の大小凹凸が刻み込まれ、怪異ですらある。露岩の膝下には奥羽山系に源を發する清流立谷川が西へと流れ、陸奥と出羽両国を結ぶ主要街道(最短路)である二口街道が東西へと伸びる。

まず霊場の根幹をなす慈覚大師円仁と天台寺院立石寺のかかりについてみてゆこう。慈覚大師がこの地に巡錫したところ、ここは磐司磐三郎というマタギ(狩人)の住処であり、磐司磐三郎は慈覚大師と対面石で対座し一山を護つたという。磐司磐三郎は一人であるとも兄弟であるとも伝えられる。柳田國男は立石寺の『山立根本之巻』によりながら「：磐神はすなわち岩の神で：」あると見ている(柳田一九二八)。慈覚大師を立石寺に引き寄せた神たる磐司の磐は百丈岩であろう。立石寺は正嘉元年(一二五七)に常陸国で記された『私聚百因縁集』に「タテイシテラ」と注記される(竹田一九八六)。菅田慶信はこの百丈岩を立石寺で最も神聖な空間であったと見る(菅田一九九五)。

さらに磐司磐三郎が慈覚大師に一山を譲る伝承は、存立地域の宗教的靈性は天台宗へと移り変わっても不変であることをも表象する。磐司磐三郎は開山堂のさらに上方に祀られ地主神となり、磐司磐三郎にちなむシシ踊りは七月七日(旧曆)に行われている。なお、磐司あるいは磐三郎と近似する名乗りを有する山岳は日本に多数あり、とくに東日本に多く狩人の伝承と繋がる(柳田一九二八)。山寺の磐司磐三郎もこうした者たちの仲間だったのである。

重要な百丈岩の頂には経蔵、一段降りて如法経碑（現在は秘宝館）、その直下に慈覚大師入定窟がある。山麓からは開山堂・五大堂を含んで、この重要な要素を一望することができ、もつとも山寺らしい風景として知られている。昭和二十三年（一九四八）に慈覚大師入定窟の学術調査が行われた。中には金棺（平安時代・国重要文化財）が安置され、頭部を欠く男女数体分の人骨とともに、頭部彫刻が納められていた〔山形県文化遺産保護協会一九五〇〕。川崎浩良は円仁自身の骨が含まれている可能性を指摘し〔川崎一九五〇〕、鈴木尚はその中の第5号人骨が慈覚大師のものではないかという〔鈴木一九五〇〕。慈覚大師の骨と考えられる土葬骨は、慈覚大師が比叡山に埋葬された後、山寺立石寺にもたらされたという伝承ともよく合致するという〔鈴木一九九八〕。小林剛は金棺内に残された肖像彫刻（国重要文化財）は仰向けに置くことを意図して、頭部（首）だけが造られた平安時代初期の作であり、高僧の面影を持ち円仁自身そのものではないかとする〔小林一九五〇〕。

金棺（長一八三^マ、幅五〇^マ、深二七^マ）は、ヒノキ造りで黒漆を塗った後に金箔を押しただけのものであるが、中尊寺（金色堂須弥壇内納置棺・国重要文化財）の金箔押木棺と比較すると明らかに小さい。初めから納骨を目的に造られた可能性がある。小林剛はこの棺には比叡山で掘り起こした慈覚大師の骨と作成した頭部彫刻を入れ、立石寺へと運んだと見る〔小林一九五〇〕。慈覚大師の首（頭部）が出羽国立石寺にあるという伝承は鎌倉時代には知れわたり、弘安三年（一二八〇）正月の日蓮の「大田入道殿御返書」には「世間に云、御頭は出羽国立石寺に有云々」とある〔入間田一九八三〕。金棺に打ち付けられていた木製五輪塔婆型経筒は、塔身に「康元二年（一二五七）六月十四日本願 建長八年九月四日 熊野御山夢想阿彌陀經ヲ如法經ニ 書寫ス示現ノ經也」との墨書があり、建長八年（一二五六）に書写した仏説阿彌陀經が納められ、紀州熊野の僧による来訪と納入を知る。元久二年（一二〇五）の根本中堂薬師如来坐像（国重要文化財）銘にある、大勧進と小勧進聖名とともに広域の往来を示している〔竹田一九八六〕。

慈覚大師の霊場であることは信仰の基層を形成し、広域の往来によって立石寺の霊場としての名声はさらに高くな